



Handwritten Japanese calligraphy on a vertical strip of brown paper, likely a title or author's name.

特別
子12
3582



なち 渡よしくはちうしぬ多
を我と男にがけりい渡川流て
早ま月のおく 実や流るる
いもせけなり 渡川とさくく
号聖乃山冬ソ流るるや爰ハ又
心のおく 陸奥乃くふの歌乃
那めーおふお布此さくう 誓ま

下三三三
錦本乃る度百報流るる存一き
道成りはうく 少一きあ那

く形なる市人をく形ハ夫婦と
おかーくそ女性儀もちうしぬ
くは冬雪の羽少く織ふ布と
くくくわまし男形もちうたるる
うはくーきさくもさくわーは

あるわ何れもくくき服

賣物おはははるる物

くく と詞 是等細布とくくわ

さ皮寺布かわ と詞 是は綿本とく

くくわ飾も本なわしはきも

しはきも當はの必物なわき

めく飛く 半詞 笑く綿本細布の

くく通及くる必物や何故乃

必物とくは屋 三 巻

伝人や必子 三 綿本細布乃

くくもな 三 所ま 三 女 三 也

及び 三 竹 三 女 三 也 三 也

う物もは 三 細 三 本 三 也

くく 三 女 三 何 三 志 三 也 三 也

くま へんまのたのめりすく人か

恋葉乃花乃色より世は錦木や

細布の志祈めり想ひ程をわ

あゝ面白にむき屋ふ相く錦木

かうぬ乃と皮恋路よりわらう

謂ふなふ 中の事三巻を

立置敷乃錦木を日毎よそへ

手束ともしやえ ツみほうぬ巻を

さゝらひのせとくを服より力

なもしをを祿を胸あひまゝに

恋ともし淡く ツうら見ももろ

名をもしく ツあゝぬを程と

よき奇境 上書 錦木を毎をな

あゝ括日 上書 くきふ乃細布

二二九一 胸ありしと ~~也~~ 二二九一 二二九一 二二九一
二二九二 細布襦り 二二九二 二二九二 二二九二 二二九二 二二九二 二二九二 二二九二 二二九二
二二九三 歌物後 二二九三 二二九三 二二九三 二二九三 二二九三 二二九三 二二九三 二二九三
二二九四 岩代乃松の 二二九四 二二九四 二二九四 二二九四 二二九四 二二九四 二二九四 二二九四
二二九五 夕日の影 二二九五 二二九五 二二九五 二二九五 二二九五 二二九五 二二九五 二二九五
二二九六 づきや 二二九六 二二九六 二二九六 二二九六 二二九六 二二九六 二二九六 二二九六
二二九七 細布乃 二二九七 二二九七 二二九七 二二九七 二二九七 二二九七 二二九七 二二九七
二二九八 者 二二九八 二二九八 二二九八 二二九八 二二九八 二二九八 二二九八 二二九八

は所乃習ひし男女の嫌は
は錦木を漬くわ女お家の門よ
立ち鴉の木なまけうはく
さしと飾るを錦木とり
去顔日阿ふつき男の錦木を
方入あふまきと成取入は
或八百燕こまもたすに

よたへ三を能く日敷うをならる哉
もたへる手束は後里みは山陰日
錦塚とくは是ちう三を錦木
五のう一人乃古墳が能く方置
錦木の敷き母塚よはふこりん
是をゆき塚とゆひ ころん
五錦塚をうへ故にの物換り

志の庵をうへる錦里ん

^{下向}あふこりんころん
^{下向}入を新くはる夫婦乃
老に先に立は旅人を傳ひつ
^{下向}の面さ方ころん錦塚を
しはるうり能をうへるをりは
をりこちる能く一人乃海ひ路

後上
つるは僧一輪一河の流を汲も
他生の縁うもや物をまゝる屋
徳遇乃あまはちうりく屋とわ
しる首一の花乃着りーをま
新ふ那ふ念う清との法屋あ
意う衆乃清吊や那二世とう
たる費王うふもさうも三年於

下
は教続了此録本終あひのこた
法の値遇乃ま衆をよひそく
海をう場尸まんやあう冬さに
出な母録本乃三年十いこぬ
うーへ流 遊め又夢日々宵
三年の値遇日々う帰るな衆と
瓦むりもとの思ひ原乃陰もわ

なまをた現をわたりやしく春哉
歌しきまひし〜我よき物新人
上ハ下ハ詞
いそしく春を歌さん世たりき
原於月乃相日 女ハ揚の内日
入る秋の心も細布乃る〜も隠
を立て機をくまは 上詞 糸つと皮
録本方持了る〜ふあつを鼓々

ともし 上ハ下ハ詞 しまりま 上ハ下ハ詞 へし 上ハ下ハ詞 へりも
な〜ひり〜ふあひる物とそそ
な〜もあ〜音 穀乃し〜の
きけんおあも 上ハ下ハ詞 きわ 上ハ下ハ詞 ちたわ
ちやま 上ハ下ハ詞 ちやま 上ハ下ハ詞 ちやわ 上ハ下ハ詞 じ
地やうく〜まわら〜ちやる
ちやま機を呈松虫寺呈〜

はくまのちりもくもくせし
きぬもかたむくまひをの
位聖乃手程の糸乃細布代
とさむ 実や陸奥のきよ乃
我の習ひもくもくならさ
わをひ世に親ひな美有換り
中法親よは源ならふ猶も昔を

歌せとの法僧の侍に随ひて
細布や錦木能くも百衣を
とくもこの執心ももは
能くもあひ難き縁よわらぬ
一葉ぬ虫の効力を無ん
悔乃案卷中にあれも影ひ
糸清と皮錦木をたこ魚皮女

下を

内子細布子機織虫の音の音
了々まゝあうあきかたき小
内外にありとけ志々被るあ
中垣乃学能たそ一冬を快ま
夜ハ既の雪道は寸こく
悔望ぬ去程子思ひの数も結
まき錦木終つ法朽つて那

昔の埋木の人心を思方那は
あまうおしひもとまるう義に
錦木ハ朽き花必終るちうひて
阿ふ子ハ涙も色に出きぬるや
窓乃漆木とも此錦木哉後
思きや榻のりりまきとほり
百燕も何一丸寝きやあふり

うよろ物なせめりる冬一冬も法
のみり二冬履あるくつても也
陸奥子ふふふふふふふふふ
錦木いす度ふなるは法よるも
門也み立木王錦木と共小括ぬ
つき袖乃法のたふふふふふも
なもやみくえ大台ふぬうさる

心法も三冬みらぬ慈法も那
法蓮なり錦木冬ち法りふ
法ぬ々ちり冬人ふさる法也
軍のうちみぬ娘一也那々膏
阿ふ其のをり法き魂好系法
四くは法乃袖の那く舞を
可ひく哥をさるも娘背乃

